九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

老いる経験の民族誌 ： 南島で生きる人びとの日常実践と物語に関する文化人類学的考察

後藤, 晴子

https://hdl.handle.net/2324/1398301

出版情報：九州大学, 2013, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

（様式　３）

氏　　名　：　後藤　晴子

論文題名　：　老いる経験の民族誌
　　―南島で生きる人びとの日常実践と物語に関する文化人類学的考察―

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本稿は、沖縄離島の事例をもとに、歴史的・地域的文脈のなかで「老いる」という誰しもの経験を、文化人類学的な視点から考察することによって、高齢社会における新たな議論の糸口を提示しようとするものである。具体的には、これまでのエイジング研究における問題を研究史から検討した１章、研究方法について考察を行った２章、調査地の概要を述べた３章、フィールドワークによって得られた知見から「老いる」という経験を異なるテーマで個別・具体的に検証した４章、５章、６章、７章、８章、全体的な議論を行った９章、および他地域の事例をまとめた補論によって構成している。

高齢化社会の到来は社会諸科学、人文諸科学におけるエイジング研究を推し進めた。しかしそこでは老いるという現象は基本的に解決すべき社会問題として取り上げられている。一方、文化人類学や民俗学では、老いをあえて肯定的に捉えようとする戦略がとられている。しかし、ここにはいくつかの問題もある。第一に、問題としての老人像を忌避し、老人や老年期を積極的に読み換えようとするあまりに、敬老の精神に満ちた異文化や過去を羨望するだけに終始しまいがちであること。第二に、「老人」というカテゴリーとしてひとくくりに議論してしまうことによって、ジェンダーに代表されるような社会・文化的な差異は無視され、そこにある多様性を把握し損ねてしまう可能性のあること。第三に、人びとの個々の経験は議論の遠景へと退いてしまい、超時代的な記述に陥ってしまうこと。そして第四に、ライフコースの最終段階として考察すべき老年期を、個別なものとして研究、考察することによって、老人たちの生きてきた文脈のなかで、エイジングという現象を捉えることを難しくしてしまうこと。この４点である。これらの問題を克服するためには、「老人（the aged)」よりもむしろ「老いる（aging)」という経験そのものを対象とし、それぞれの人生だけでなく、他の世代や社会に何をもたらしているのかを考察しなくてはならない。そのためには高齢者施設といった限られた空間で議論するよりも、地域社会で生きる人びとについて考察する方が効果的だと考えた。

よって本稿では人口約 900 人の過疎・高齢化のすすむ沖縄離島の事例を取りあげて考察した。97 歳の年祝の＜カジマヤー＞に代表されるような独特の長寿文化をもつ沖縄の例にもれず、島は様ざまな伝統的な行事や祖先祭祀の盛んな地域であり、人びとはそうした慣習と深く関わり合いながら日常を送っている。日本本土とほとんど変わらない高齢者に対する認識のある一方で、沖縄独特の長寿文化や長幼の序、高齢女性の宗教的な高いステイタスは以前のそれとは変化しながらも現在も存在する。

文化的な基盤は人びとの日常と深く関係している。近代医療だけでなく民間療法とも付き合いながら自らの身体的な衰えと向き合う女性。都市における子供たちに囲まれた快適な暮らしよりも、位牌を守りながらの島での生活を選ぶ女性。足を引きずりながら、それでも一人暮らしを続ける女性。こうした人びとの日常には、人びとは自らの衰えに積極的に立ち向かうのではなく、「年を取ったら仕方がない」と受け流すことによって、過干渉とはまったく異なる身体との向き合い方がある。また、どこか生き難さを感じる人びとの実践や選択の背景には、家族といった親しき他者、宗教的なるもの、島へ

の愛着といった様ざまなヒト・モノとのつながりの存在がある。「いま―ここ」を説明する人生の物語（ライフストーリー）を通じて示されるこれらのつながりには、死者儀礼や祖先祭祀を背景に、死者との具体的な関わりのなかで育まれる死者との継続する絆も含まれる。親しき死者との生前から継続する密接な関係は、時に人びとの人生の選択そのものを左右する重要なものとして立ちあらわれる。また、島の文脈は、現在の老いる人びとだけでなく、今まさに老年期にさしかからんとする、戦後生まれの世代の人びとの経験にも関係している。彼らは親世代の経験をともに経験しながら、親世代のそれとは異なる新たな経験を構築しはじめている。

人びとの経験は個別的なものである。しかしそれは、個に還元されてしまうものではない。それぞれの経験は、昭和という激動の時代を沖縄離島で生きてきた人びとの「世代としての経験」、「群れとしての経験」である。そこには「老いる思想」というべき、老いる人びとの老いる身体との付き合い方や人生の選択のあり様、死者との向き合い方といった知識や技法に通底する思潮が存在する。いうなればそれは、生きる知恵というべきものである。老いる人びとの経験を考えることは、生きるということを考えることであり、それは長寿の大衆化した時代を生きる人びとと新たな対峙の方法をもつことにつながるのである。